

神奈川支部情報特集号

発行日 2007年10月10日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

以下の証言は撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部の主催で開催した証言集会に於ける久保寺さん証言の原稿を打ち直したものです。

証言のあとで、原稿をお借りしました。原稿用紙に鉛筆でしっかりと書かれた丁寧な文字に、久保寺さんの誠実で、几帳面な性格が溢れていました。何回も書き直されたと思われるところもありました。証言をおねがいして何ヶ月かの間に少しずつ少しずつ書き留められてこられたことがよくわかります。

できれば久保寺さんの誠実な人柄が染みこんだ原稿そのまま読んでいただきたいところですが、できるだけ多くの方に読んでいただくためにワープロで打ち直しました。久保寺さんの人柄を想像しながら読んでください。

私の犯した戦争犯罪と反省

久保寺さん証言 (2007. 5. 13)

皆さん、こんにちは。私は秦野に住しております久保寺と申します。

5月の風薫る季節に本集会が開かれ、太平洋戦争中の私の「中国侵略戦争の体験」などのお話しの機会を設定された「撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部」や、出席くださりました皆さんに敬意を申し上げます。

私の住むところは小田急線渋沢駅で下車し、北側出口へ出ますとバスで「菩提經由秦野行き」に乗り、大倉入口から河を渡ると戸川バス停で降ります。秦野は盆地で、北側には丹沢山塊があり、水無川沿いの地域です。私は1920年(大正9年)に農家の長男として生まれ、兄弟も多く、普通の農家に育ちました。1964年(昭和40年)ころまでは、秦野と言ったら「葉煙草」の産地で、冬は麦や菜種、夏は葉煙草生産を経済作物にしなから、落花生、陸稲、里芋、蕎麦、さつまいもなどを栽培する農村風景でした。いまは中都市の町並みで、人口も

17万人に近く、工業と商業の街となり、多くの農地は市民居住地に変わりました。農家は山麓に、老人が多く、若い人々は勤めに、農業は特定の専業農家が従事している状態です。

私は1927年(昭和2年)尋常小学校1年生に入学、2年生では教育勅語が暗記できるまで修身の時間に教えられました。昭和の初め、校庭中央の奥に「奉安殿」が造営されて天皇、皇后の写真が収められ毎朝の朝礼は校庭で最敬礼をして教室に入るのが日課でした。

入隊

1931年(昭和6年)に「満州事変」が勃発し、翌年に「満州国」が建国した。そして37年(昭和12年)には「支那事変」が始り、日本軍は中国本土に侵略、35年(昭和10年)高等小学校卒業、青年学校も義務とされ、夏は自家農業と軍事訓練と多忙で

した。自分は40年(昭和16年)7月に教育召集により甲府第49聯隊へ11月まで入隊、厳しい内地での軍隊生活も経験しました。

太平洋戦争は41年12月8日、宣戦布告された。同年4月に私は北支派遣第59師団の兵士として中国山東省に侵略戦争に参加しました。

永年の沈黙を破って真実を語り始めたのはなぜか？

私は帰国後、平和と民主主義の活動を地元では活動していましたが、中帰連には「健康上」の心配と、性格上の弱気な面もあって、出席は殆どしませんでした。小泉内閣後、憲法や教育基本法が表面化したことが、きっかけとなりました。「これはたいへんなことになる」と思いました。

安倍首相は、「自民党を結党したのは改憲のためだった」と言います。この5月の改憲手続き法案の強行採決を狙っています。安倍首相は訪米し、「日米の揺るがぬ同盟」を確認した。これはアメリカのためなら日本人の犠牲もいとわぬということです。しかも戦争へ行くのは勤労市民の人たちです。みなさん、どう思われますか。

日米の指導層は、従わぬ国は「ならず者国家」と決めつけ先制攻撃も叫んでいるのです。現在、日本国憲法「第9条」をみんなの力で守りたい、と考えています。私たち1000名の中には、初年兵でも戦犯となった人もいます。日本の若い人たちが私のように他

国民を殺害するようにならないためには、今こそ「護憲活動」で多くの国民に訴えるときだと考えます。平和憲法を守ることは日本国民とアジア諸国民の願いと思います。

敗戦間近の中国侵略戦争の体験に話をすすめたいと思います。

済南南方の津保線で陣地構築中の第109大隊は、6月初めころ北朝鮮の日本海沿岸に面した興南市に59師団とともに撤退しました。郊外の日本人小学校は、兵営化し、翌日から爆薬を抱えて敵戦車のキャタベラの下に飛び込む、「一人一戦車体当たり戦法」という決死の演習となり、連日炎天下で汗とほこりにまみれていました。

8月に近いころ、5中隊は山の中に移動します。このころは食糧の「食いのばし」というので3食とも「カユ食」になり体力も落ちていく感じでした。山中では「炭焼き窯」のできる兵を集め、めまぐるしく変わる指示の日々となります。

1945年8月15日、「大元帥陛下より全国民、全軍人に対し戦争終結の詔(みことのり)が下された」と数日後、5中隊長から伝えられて敗戦を知りました。この時の将兵の気分はガツカリと、“気も動転”し夢遊病者のような自分らでした。その翌日大隊長は自刃したと伝え聞きました。59師団の全兵器はソ聯軍に引き渡すこととなりました。

部隊の安全を守るためには、丸腰で

衛兵の歩哨に立つことにもなります。国道沿いの衛兵歩哨が何日も続く中で、日本人の老若男女や子供連れが、着の身着のまま昼夜を分かたず、南へ避難する多くの群れを見ました。敗戦の憂き目の哀れに感じ胸が熱くなる思いでした。上級将校らは突然の敗戦を「悔し」がりがたは一段と強烈でした。酒に酔い、大声を張り上げ、狂ったように「この悔しさを忘れまいぞ」「捲土重来だ」とわめき立った。あの叫びは忘れません。

シベリアへ

8月下旬、興南近くの駐屯地から山あいの田舎に向かい、裏側の小高い山の或る五老里小学校校庭に行き、そこで部隊はソ聯兵の管理下に入りました。天幕生活が10日くらい続きます。学校の近くには水量豊かな河川もあり、不要となる日本兵のお金欲しさに、朝鮮の若者や子供が餅や食べ物を高値で運び、川辺に集まります。ソ聯兵の威嚇射撃や、銃弾の飛び交う中で日本兵も不要となる貨幣の不安もあり、買って食べたいと言う安らぎの一時でもありました。

8月末に突然、出立指示が出されて興南港で乗船した。ウラジオストックへ搬送される捕虜集団となりました。夕、朝食の準備もなく港から貨車でハバロフスクとの中間にあるニコリスクに下車、この駅から軍用トラックにすし詰めされて東方に疾走する捕虜となりました。

実弾こめた自動小銃に武装された監視兵が二人、言葉の通じないのが難点でした。東方に幹線道路を数10キロ走り、夕方近くに急ごしらえの収容所に着きました。バリケードが張り巡らされた道路沿いの場所で、水田地帯の国営農場でした。秦野盆地の4倍くらいの盆地らしきところです。道路の向こう側には20戸位の民家がありました。

数日後、土佐鎌を持たされて稲刈り作業に駆りだされました。農作業は生まれて初めてという東京出身者の多い5中隊の捕虜では作業能率が上がり、毎日作業しても稲刈りは進みません。何100ヘクタールもの水田は10月になると氷が張る寒さで、寒中はマイナス20度から寒い日は30度前後になります。食事は朝夕「カユ食」で夜はパン300グラムと少々の副食、間食はなしでした。屋内は寒くなかったが、作業中の寒さは経験した者でないと解らないと思います。

この(国営農場)ソホーズに3年、その後は炭坑、建築作業、山林開墾、山間地での鉄道敷設、ウラジオストックでのドック作業等に従事しました。1950年朝鮮戦争開戦年の4月ごろハバロフスクへ集結させられ、作業もなく収容所の生活となります。仲間が古新聞で見たという話によると「日本人戦犯を新中国へ送還する」という「噂」は一瞬にして広まります。自分は上官の命令でやったことで、重い責任があるとは考えていませんでした。だが「八路軍討伐」作戦にはいつも出

動させられていました。「日本が負けたのだからやむをえ得ない」と観念しようとしても無念さはつりました。

「帰国のための民主主義者」も多くいました。自分はウソをつく気もなく、調査員に作戦出動が多いことも確認される。今後、どのようにされるのかわからない不安な自分でした。

撫順戦犯管理所へ

1950年7月ハバロフスク駅でソ聯兵の厳重な警戒の中で貨物列車に乗せられます。どこへ送られるのかも知らされずに乗せられた車両は締め切られた。暑く、むさ苦しい貨車の中でトイレにも外に出られず、蒸し風呂の中へ放りこまれたようだった。捕虜とは人権も無視され、人間扱いされぬ存在です。乗車にあたっては飲み物も食料も与えられず、ただ、ものものしい厳戒に息詰まる半日でした。貨物列車は中国東北部の綏芬河（すいふんが）の隣接地、小さな田舎のホームに停車した。ここが国境でした。

目前には中国人民解放軍兵士が整然と整列し、綏芬河駅中央に客車がズラリと停車しています。貨車から下ろされて暫く立たされた。やがてソ聯と中国の両政府要人の会見引き継ぎが終ると、この客車に我々戦犯捕虜は乗車を指示された。列車内の指定席に腰をおろし、座ることが出来ました。

何という変わりようでしょう。丁重な態度、親身になって親切に世話をされる姿勢に、内心感服し神妙な気分

さいなまれる思いでもあった自分でした。車中の中国的人道主義に徹した中国人民の接待と厳然たる対応に内心では敬服心も感じました。だが、この先どのような犯罪人として対応されるのか疑惑と緊張感もあって、落ち着くようにと心では思うのだが不安感は重なっていきます。敗戦後、小心になった自分、何としても日本に帰りたい自分でした。しかし、「まな板の鯉」となってしまいました。中国共産党の八路軍討伐に42年4月から45年6月まで、負傷も病気もせず作戦に参加「お国の為」、皇軍として心命を捧げて一生懸命に盡した結果の運命となりました。

1950年7月、969人は中国東北（旧満州）地方の撫順管理所に収容されました。所内の三所の一室に元兵士や元満州国の警察官ら、10何名ただただろるか、大部屋の集団生活となります。翌日のことだったか、「中国政府は皆さんに労働はさせません。皆さんには学習をしてもらいます。」とスピーカーを通じて放送されました。日本戦犯人への学習で「なぜ皆さんは武器を持って中国へ侵略したのか、よく考えるよう望みます」と、この学習が何年も続くのです。

はじめはは、ソ聯から新中国に送還された不満や、中国への不信感など室内で討論したりということから始まりました。中国では、日本人の好む米飯、魚、煮物、うどん、正月は「おぞうに」、祝日にはごちそうも出ました。而も毎日腹一ぱい食べさせてもらえ

たのです。監獄とは思えない待遇です。それでも不満が出る自分たちでした。各人毎に与えられた布団や毛布は新しく、睡眠時間も十分に与えられました。日課のきまりで起床し、洗面などから始まり、朝食、学習、体操や運動、時々映画や娯楽もありました。窓はガラス張りの部屋で明るく、理髪も2ヶ月に1回くらいしてもらい、医務関係の先生も常時、気をつけて診てくれました。

管理所は我々に体刑も拷問もなく、荒修行もなく、大声でどなって威張ったり、侮辱や大声で指示、指令など一切ありませんでした。学習のためには用紙、筆記用具、本、新聞等の資料も不足なく与えられ「自分が銃を持って中国へ何しに来たのか」をくり返し、くり返し学習を重ねました。

だが俺は命令されたことをやったので、と「納得いかぬ」むずかしい戦争犯罪を自分の罪として認める意識には決心がつきません。こんな時、中支派遣軍だった将校の模範的認罪態度で残虐な住民斬首の自白と決意を聞かされました。

学習を重ねて数年、住民射殺、特に子供を射殺した魯東作戦時の犯行の認罪は「自分の処刑のこと」も考え、決心できたのはその後でした。

自分は作戦に数多く出動した。第1回目の師団の魯西策戦に出動し、上官の命令に従い黄河以北の省境方面の農村集落内の兵器などの「剔抉(てっけつ)」を実行します。同時に初年兵は、毎日黄塵と汗にまみれ、住民不在

の集落の住宅に押し入り、鶏、卵、小麦粉、野菜、薪など掠奪しました。

作戦終了間近に、八路軍と遭遇し一日中激戦となりました。戦場は館陶北陽堡という農村集落。日本軍の多数の戦死者も出ました。翌日集落内の家探しで重傷の八路軍らしき兵を連れ出して来た指揮班の野崎曹長は情報収集を通訳に命じ、二等兵の自分は警戒兵として立哨しました。通訳が何と言っても答えぬ捕虜にいらだち、軍刀の先をづけづけと膝を突つつく。怒りに満ちた敵兵は「日本軍は今は勝ち誇っていても、近いうちに必ず負ける。中国人民が勝つ日がくる。」「我々は必ず勝利する。殺すなら殺せ」と言ったと言う。曹長は直後、「この野郎」と大声でどなり、斬首しました。自分は斬首を幫助しました。

他隊では初年兵の教育終了時、度胸だめしと言って生きた捕虜や住民を刺殺教育に使用したと聞きました。

略奪、「劳工狩り」作戦、

続いて42年11月から魯東(山東半島のこと)作戦に出動します。青島(チンタオ)から一昼夜北東方面へ行軍するとそこが作戦地域でした。ここは敵地区とされ、半島の北から南に歩兵部隊は展開した。分隊毎に日の丸の旗や指定された旗を立て、金ダライや音の出る金物を叩きながら包囲網を縮小させて、「15才くらいから60才くらいまでの男は全員逮捕する」「逃げる住民は射殺せよ」と命令され

た。毎日続く「劳工狩り作戦」です。

夜は50分毎に“たき火”をして、その合間にも分哨兵が目を光らせ警戒に立つ。逃げまどう住民を捕まえ、車両部隊に引き渡すのです。何人くらい逮捕したのか、初年兵には知らされることはありませんでした。帰国後、日本国内の炭坑などで苛酷な労働を強いられ、粗食も十分与えず、労働の果てに亡くなられたこの人たちを想うとき、国策とはいえ申し訳なく、反省する私です。

自分一等兵は小隊長の伝令兵として作戦に参加していました。煉瓦屋根の続く道路沿いの河を越え、広い丘陵のつづく先には、小高い山々の続く寒い初秋でした。中条小隊長は双眼鏡で周囲を見渡し、凸凹している地形の天然の窪地に、「あそこに人がいる」と叫んだ。急ぎ足で近づくと、母と子の親子二人が小さくうずくまり、無言でうつむいて着物などに包んだ荷物を隠すようにしていました。

「久保寺一等兵、うずくまっている男を撃て！」小隊長は突然命令しました。自分は命令に従い、立ったまま小銃の引き金を引きました。自分は20分の近くで機械のように作動し、少年を射殺しました。自分は弟を射殺したやうな感じもし、心臓の高鳴る思いでした。中条小隊長は言いました。(少年は)「2~3年後には八路軍になるのだ」と。

自分は、戦争とは軍隊と軍隊との戦いで、たとえ敵地区といえども住民、子供まで殺すとは夢に考えたことは

ありませんでした。私は認罪にあたって苦しみました。「はい、私が子供を射殺しました」と回答をすることは、「私を死刑にしてください」と同じことだと覚悟しました。

現在、皆さんと憲法を守りたいと訴える私は、この加害責任を取り、認罪を行動にしてこそ真の認罪と私は感じています。皇軍は日中戦争では住民も敵として見ていたのだと私は思います。この作戦中も住民のいない集落を占拠し、副食等は大部隊で略奪しました。作戦終了は12月の末、5中隊は山東半島から平蔭県城まで毎日の行軍で帰隊しました。身体に30kgの軍装で、一日30キロから40キロも歩く兵は苦勞が絶えません。

平蔭県城では正月休日も一日だけ

厳冬の平蔭県城で事件が発生した。城門を閉め、街中住民の検証などが行われた。43年1月のことでした。「城内に入った密偵が逮捕された」と聞きました。その数日後、八路軍関係の密偵数人が、軍刀を持つ下士官以上の将校ら5中隊総出動命令の下、平蔭県城側の畑に深い穴を掘り、敵のスパイが斬首された。

その日、城内住民の多数が城壁の上で見えていました。日本軍兵士は東西の門近くの処刑場の周辺に配置され、厳戒態勢の中で中隊長が処刑し、5中隊兵は幫助しました。皇軍は国際法も無視し中国人民は簡単に虐殺されていたのでした。

同年3月、109大隊は黄河以北へ討伐作戦に出ます。すでに住民は逃げ去り、交戦もなく各集落に宿営した。農民の食糧を収奪するだけの作戦に終わります。だが、この作戦時、住民の住宅内の「なべ」や釜は叩きこわせと中隊長の命令により、住民生活を破壊しました。

5中隊は4月頃、黄河の北側の平蔭と東阿県境の陽柳鎮の近辺に中国軍保安隊の警備望楼造りに約2ヶ月駐留し、5中隊は望楼建設推進役を行いました。周辺住民は、武力でこの望楼建築のための資金提供と直接建築の負担苦勞など、造営する役割を強いられました。太行作戦に参加しましたが、交戦もなく住宅は破壊され、ここでは何もない無人の家のみでした。

43年11月から12月は師団の魯中作戦に参加した。国民党宇学忠軍団と59師団は11月下旬激戦、数千人以上の敵軍に、航空隊の爆撃や、山砲隊、工兵隊も加わる山岳戦の末、包圍殲滅しました。日本兵の死傷者も少なかったが、夕刻には敵側からの銃声もなくなりました。この戦闘で5中隊は山寨を包圍攻撃し、殲滅の役割を果しました。

数日後、払暁攻撃をしましたが敵影はありませんでした。12月半ばころ作戦は終了し、済南市に近い長清県城内に移転しました。正月も元旦だけの休日、1月中旬ころだったのだろうか、長清県城近辺野宅地付近から通信電波が発信されているとの情報が入った。5中隊全員は個人住宅などの別決

(てっけつ)を命ぜられて家探しをしましたが、それらしい機材も見当たらず、住民は危険な“まなざし”で警戒していました。

その数日後、播家店という分屯隊に派遣命令がされ、小川小隊長以下30名くらいの5中隊兵士で編成されて出発しました。目的地へ車両輸送されて軍用道路を疾走しました。この軍用道路は、済南市の主要道路の黄河付近を起点に西方の臨清県や館陶県など数10里も続く直線に近い道路で、日本軍の軍用道路として現地軍が新設したものでした。

播家店分屯隊は集落外にあり、済南と臨清県の間の中間の要衝にあつて物資輸送の自動車の検問所でもあります。壕は深さ4尺、幅4尺その土砂は道路の盛土となつて使用され、八路軍の横断を遮る役割を持つ。道幅8尺のこの道路は日本占領後、武力による強制で農民の土地を取り上げ、周辺住民にウムを言わせぬ苛酷な労働によってつくられたものと思います。

播家店野分哨は道路沿いで「関所」でした。下士官たちはトラックを停車させてめ「ぼしい物品」を収奪する。また、分屯隊の周辺部落に対しては、分屯隊長名を以て通知し、生活必需品、鶏、豚肉など貢ぎ物を要求し、住民の貧困も省みず、隊全体が贅沢な日常を過ごしていました。7月上旬、小川分隊長は警備を交代し原隊に復帰します。

小麦収奪作戦

師団作戦の小麦収奪作戦に出動しました。109大隊5中隊は東平県周辺に出動します。東平県は黄河沿いの南側にあり、東阿県は黄河沿いの南側にあり、東阿県の西南方で東平湖という湖のあった所です。「支那事変」当初、鄭州付近の下流で黄河の流れを切断され、本流は変化し、元の黄河の流れは殆ど無くなり、東平湖は干上がり、湖底を周辺の農民は畑に変え小麦などを生産していました。

師団は、小麦の収穫が終わったところを見計らって収奪作戦を開始した。東平県周辺の収穫された小麦は良質で、量も豊富でした。5中隊兵は中隊長の指揮下で牛車100台で農民の牛方もついて麻袋を積んで出かけました。すでに農民は逃げて、留守の集落に押しかけ、毎日強奪に走り回りました。特に男は逃げてしまいました。たまたま私たち4人は留守番をして、日焼けした主婦が幼児を抱えていた家に押し入りました。古兵らが手真似で「麵をつくれれば小麦は取らない」と伝えたら、抱えていた幼児を寝かせて大急ぎでうどんをつくってくれました。自分ら兵士は毎日同じ飯に飽きていたし、暑い夏に俵を担ぐのは重いし、元々兵士らは働くことは嫌いでした。

30分くらいでうどんができあがり、4人の兵は素早く食べました。食べ終わったところへ小川小隊長が飛び込んで来るなり、「コラッ、お前ら何しとるか、早く袋に詰めろ」と怒鳴られ、監督指揮を始めました。兵隊た

ちは無言で実行しました。何という「だまし討ち」と、主婦は地面を叩いて騒ぎ、怒っていた。それを尻目に小隊長は全部袋に詰めさせた。それを牛車まで運び去る自分らでした。

略奪した小麦は全部県城内の日本軍分屯隊近くの仮設倉庫まで運び込むのです。どの牛車も荷物が一杯で、100台もの車は長い長い行列のために前へ進まず、日暮れが迫ります。八路軍の銃弾がパンパン、ヒュン、ヒュンと飛んできます。「早く、早く」と急かすもさっぱり早くならない行列、たまに手投げ弾の爆発音に内心怖じ気を感じずる夕暮れ時でした。こんなところで戦死したくない。その場面に当たると後ろ弾は恐怖です。あたりは次第に暗くなり、八路軍の姿は見えない。数日前、少数の八路軍と交戦中、作戦初日に初年兵の戦死者を出す厳しさの小麦略奪作戦でした。

作戦中、輸送部隊は略奪小麦をトラックで司令部のある済南市内へ連日輸送したと聞きました。小麦略奪作戦は約3週間で終了し、長清県から出発した5中隊は済南郊外の段店へ移りました。後日聞いた話では、あとき59師団の全ての部隊が現地調達を指令されたようです。現地調達は農民を離反させる結果となり、現地軍の兵士たちは強盗集団となっていました。

八路軍と農民群衆は、小麦奪還のために城内を攻撃し、日本軍分屯隊は全滅し、略奪して県城内に蓄積した小麦は持ちさられてしまった。また搬送中も集落内を通過せねばならぬ所で待

ち伏せ攻撃に会って全滅し、小麦は全部奪還されたという。このころから戦況は急変しました。

特殊訓練

59師団は、師団選抜分隊を編制して9月、中隊長命令により自分兵長は師団へ派遣されて、特殊訓練を受けることになりました。「特殊」とは、中国服で八路軍に似せた軍装をする。軍靴は綿製の“しえ”に、鉄帽、弾丸入れは布製品で原に巻き、飯ごうは携行せず、銃も肩にかけ、手榴弾は腰に2個、食糧はパンだけ、他に捕縄1本の武装でした。

自分は96式軽機関銃の射手です。拳銃持参での1ヶ月の訓練後敵地区へ、夜間専門の突撃隊でした。上山中隊長の分隊長となりました。師団直屬情報で、策敵行動の夜襲ですが、八路軍は寸前の退散が殆どで、遭遇戦はありませんでした。

11月中旬ころ、渤海作戦中、海辺近くの集落を払暁攻撃の際、寸前に八路軍は退散し、敵影の直ぐあとに飛びだした住民一人を300メートルくらいの距離で射殺しました。この作戦中、食事はすべて民家は押し入ったの盗み食いでした。

この朝も30分間の食事、集落へ飛び込んで或る者を奪う自分らでした。その直後、「109大隊の救援に出発する」と一言、知らせを受けた中隊長。畑や荒れ地を真一文字にひた走り、一昼夜連続、強行軍でした。腹は空き、

睡魔のおそわれ、堀に落ちたり、つまずいたり、隊列は乱れるが中隊長は休息も取らせず早足でまっしぐらに109大隊の所へ急行しました。

夜も白々と空けはじめたころ、数発の銃声がありました。パンパン、ヒューンとうなる弾丸、「戦場は近い」と直観する。銃声は、空腹、睡魔も疲労も一瞬に吹っ飛ばされてピリッとした緊張感で戦闘態勢に入った。そのうちに散発的に聞こえた銃声も途絶え、八路軍は退散したようで、戦闘にはならず敵影は消えていたのです。

昨日からの八路軍の攻撃で109大隊は惨敗した。その惨状を自分の目で見聞き、同年兵は殆ど戦死していました。集落宿営準備に入った109大隊の防備のゆるみの間隙を突かれて八路軍の総攻撃に、苦戦を強いられた、と感じました。

1945年元旦、兵舎の広場で大隊長の訓辞中に敵戦闘機P51の飛来による襲撃を受けて兵士一人が負傷した。戦況は厳しさを増す日々となりました。同年1月初め、中隊長命令により済南市内にある教育隊に自分兵長は派遣されます。韓国出身の大学生、専門学校生たちが徴集され、入隊するので初年兵教育の使命を受けての派遣でした。一期の教育を3ヶ月で完了しました。続いて現地徴集の日本人初年兵教育に任せられ侵略戦争を一層押し進める役割を果たしました。

私は小学校へ入ると「忠君愛国」や「教育勅語」の教育を受けて育ち、母方の叔父はよく勉強すれば「温泉に連

れて行ってやる」と言われて、それを楽しみに低学年時代は励みました。力のある人への従順な社会関係の中で育ち、貧しくとも忍耐強く性格させられていた時代です。天皇は神格化され、「国に尽くすことが親孝行」とされた時代でもあったのです。

私は国のため、天皇の軍人として「出征」することは当たり前と考えていました。「支那事」や太平洋戦争も日本政府の政策を「鵜呑み」にして「正義の戦争」と信じて中国へ侵略しました。

管理所で生まれ変わって

入隊し、作戦中に鶏を捕まえても殺すこともできずに、古兵に虐められ、殴られた悔しい思いもしました。日本軍は古兵と新兵の差、一階級の差は厳しく、どんな理由があろうとも隊内では「いいわけ」は通らぬ仕組みになっていました。「上官の命令は朕の命令と心得よ」と軍人勅諭にあるように、命がけで戦場で働くことだけが兵士としての役割だったのです。

管理所の学習を通じ、中国人民が歴史の本当の方向と人間としての後半生を導いてくれました。学校では、「正直は一生の宝」と教わりましたが、正直者がバカを見ないためには世の中の本当の真実を知ることが必要だと思います。戦争体験は、その苦難な認罪から知り得た懸命の結果の心情です。

日中戦争から太平洋戦争に拡大させた日本軍国主義政府は、連合軍の反

攻によりアメリカの広島、長崎への原爆投下、沖縄の防衛戦を通じ多くの市民が犠牲になりました。大都市、中都市の市民も空爆で「焼け野が原」とされ、死傷者も大量に、苦難も重なった前大戦の結果となりました。

日本軍の侵略による中国や東南アジア諸国民は2千万人以上が殺されたと言われます。日本でも310万人が戦災で死んだと聞いています。私の従兄も3人戦死し、弟も南方戦線で亡くなりました。戦争はもうこりごりです。再び日本は戦争はすべきではないと思います。兵士一人一人は個人的に何の恨みや憎しみもないのに国のために殺し合う戦争、特に今はイラクでも行われている住民を巻き込んだ虐殺戦争にもつれ込む時代です。なおその上に、大量の殺人兵器やクラスター爆弾、ウラン弾まで使われ低ます。戦争で国際紛争を解決する時代は過去のものとなったはずなのに。

小泉政権後、自民党総裁となった安倍首相は、昨年11月“教育基本法”を強行採決し、2007年通常国会では教育3法案を、5月中には成立させようと計画している、と新聞は報じます。安倍首相は4月下旬、訪米時、日米の「揺るぎなき同盟」をブッシュ大統領と交わし、米国一辺倒を表明しました。

自民党は「改憲」ではなく60年目の憲法記念日に「新しい憲法をつくる国民大会」という名称で安倍首相が「自民派党総裁として約束した以上、憲法改正を政治スケジュールに必ずのせていく決意だ」と表明した。中曾

根元首相は「安倍氏は自民党本流の政治に戻した」と称えたと新聞は報じます。

一方、自民党大で会では「天皇を国民の象徴と戴き」と述べ、また新憲法制定促進委員会準備会も大綱案で「防衛軍創設や男系男子による皇位継承」の狙いも根ざしていることが朝日も報じています。

安倍首相が昨年 10 月、先ず中国を訪問した。中国の国家主席と首脳会談の際合意した「歴史を直視」し、未来に向けた政治、経済の両輪を力強く作動させ、日中関係を高度な次元に押し上げたと言われている。共通の戦略的利益に立脚した互惠関係の構築に努力する」「日本は、平和国家として歩み続けると強調した」と伝えたプレス発表の報道に「安倍内閣が帰国後実行してこそ信頼されるだろう」と疑念ながら知りました。「歴史の直視」も無視し、「戦後レジュームの打破」「憲法改悪」に熱中し、中韓外交も、アジア諸国の心配も省みぬ自民、公明の態度は許せません。

平和憲法第 9 条 2 項を政権党の思いのままに変えることを計画し、今国会で「改憲手続き法案」を参議院憲法調査特別委員会で自民、公明は強行採決し、14 日、本会議で成立させるという。自民、公明政権は、“靖国派”を中心にアメリカと日本の先生攻撃の軍事優先で他国を威圧し、日英同盟を主張する中で軍拡し、「改憲」し、戦前の軍国主義の早急な復活を狙っている。そのような自民らの企図を皆

さんと共に阻止することに努力したいと思います。

自衛隊はアメリカの侵略戦争に加担させられ、アメリカ兵と共に戦場で戦闘し、犠牲もでることでしょう。何のため、誰のために戦争をするのでしょうか。前大戦では経済的利害関係から始められたのです。

平和憲法は日本国民の命を守り、世界とアジア諸国民へ再び迷惑をかけぬ証としてつくられたものと思います。敗戦後、日本経済は驚異的發展を遂げました。これは国民の勤労努力と平和憲法制度が大きな役割を果たしたと考えます。国民が一致努力して創りあげた成果としての国民経済の発展でした。

中国侵略戦争中、日本軍国主義政府と派遣軍は、あらゆる手段を用いて従わぬ住民に対し、殺し、破壊し、焼き払い、略奪などを常時行い、多大な損害を中国人民に与えました。天皇の軍隊として大罪の自分でした。皇軍は捕虜は殺し、住民も捕らえたら虐殺しました。

中国政府と共産党は「学習を通じ、鬼の心を人間性豊かな真人間に導いてくれました。」自己の戦争犯罪を反省し、如何なる判決にも意義は申しませんと日本人戦犯全員が認罪した撫順の奇蹟。

中国人民政府は特別列車を編制し、特別列車を編制し、1ヶ月の時間をかけて私たちが犯行した広大な地域を、中国の東北、華北、華中、北支、中支、南支の一部を参観させてくれました。

中国民主権下の建設の息吹をこの目で見、私たちは過去を謝罪し、「日中友好」と「再度日中は戦争をしません」と誓いました。全国どこでも中国の人々の心情に再び迷惑をかけるようなことは人間としてできません、と現在考えている私です。

管理所に帰ったら間もなく、中華人民共和国政府と中国共産党は1956年6月に瀋陽特別法廷を開き、我々日本人戦争犯罪者の大多数の者へは不起訴、即時釈放と決定されました。忘れ得ぬ寛大な判決に、永遠の喜びに感激した私でした。

私は帰国者の一人になりました。天津港に入港して待つ興安丸に乗船できた私たちは管理所の人々の見送りに感謝しつつ別れました。同年8月ま

で第3梯団までに大部分の者は帰国しました。有罪となった高級将校、偽「満州国」高官36名、太原戦犯管理所の9名も20年以下の懲役刑で、死刑も無く、而も終戦時から起算するという寛大な判決で、1950年代に殆どの者が帰国を許されたと聞きました。

日本軍の犯した大罪と比べれば寛大政策に尽きます。この寛大政策によって中華人民共和国政府の新政策の偉大さを知りました。私は人間性豊かな新政策の心情に感謝し、大切に考え、余生を社会の皆さんと共に平和を守りながら暮らせるよう努力して参りたいと考えています。今日は不十分な話ではありましたが、ご静聴ありがとうございました。

2007年5月13日 於：かながわ労働プラザ（石川町）

撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部主催「戦争体験の証言と講演の集い」での証言

<証言者> 秦野市戸川541 久保寺（くぼてら） 尚雄（ひさお）

久保寺さんの証言の後、第2部で中央大学教授の姫田光義先生から「日中戦争との傷跡と人間性」と題して、久保寺さんの証言に解説を加えながら講演していただきました。（「神奈川支部情報」5号に収録）

集会には50人が参加して、多くの感想も寄せられました。